

## わが国における「母親の育児困難感」の概念分析 —Rodgersの概念分析法を用いて—

井田 歩美

### 抄 録

本研究の目的は、母親のもつ育児困難感の概念を分析し再定義することにより、今後の研究や育児支援への示唆を得ることである。分析対象は、「育児困難感」「母親」をキーワードとし得られた21文献であり、Rodgersの概念分析アプローチを参考にして行った。結果、属性として【母親自身のネガティブな感覚】【子どもへのネガティブなかわり】の2つカテゴリー、先行要因として【母親の要因】【子どもの要因】【夫の要因】【育児支援】【家庭の要因】の5つのカテゴリー、帰結として〔抑うつ感情の高まり〕〔子どもとの関わりの質の低下〕〔愛着形成の阻害〕の4つのカテゴリーが抽出された。以上より、「母親の育児困難感」の概念を、『母親としての的確性に欠けるという認識に陥り、育児全般に対して自信のもてない母親自身のネガティブな感覚である』と再定義した。

キーワード：概念分析 (concept analysis)、母親 (mother)、育児困難感 (childcare difficulty feeling)

### I. 緒言

『健やか親子21』<sup>1)</sup>では育児不安の軽減を取組課題として掲げているが、少子化や核家族化、地域連帯感の希薄化による育児の孤立、女性の就労増加などを背景に、母親の育児のしづらい状況は改善されていない。

育児不安の研究は1980年頃より牧野<sup>2)</sup>によって始められたが、育児ストレス、育児ノイローゼといった用語も同義語として扱われてきた。1993年より川井ら<sup>3), 4)</sup>は、育児不安の概念や構成要素を明らかにする研究を継続し、育児不安の中核的要素といわれる2つのタイプの育児困難感を定義した。このように時代の変遷とともに母親の育児のしづらい状況を表現する用語は変化しているが、その定義は未だ曖昧である。そこで、本研究では、Rodgersの概念分析法<sup>5)</sup>を参考に、「母親の育児困難感」について検討した。母親のもつ育児困難感の構成要素を分類することは、育児不安などの同義語との相違点が明確となり、今後の研究や育児支援への一助になると考える。

### II. 研究方法

#### 1. 分析方法

概念の分析方法としてRodgersの概念分析アプローチを参考にした。Rodgersの概念分析の特徴は、時間や状況の変化に伴う概念の変化に注目し、関連する概念と比

較・対照することで概念の特性を明らかにしようとするもの<sup>6)</sup>である。言葉の性質や使われ方に焦点を当て、概念がもつ属性を明らかにしていく属性理論に基づいている。分析対象となる文献は母集団として20%程度、または最低でも30の文献をサンプルとして収集、分析し、文献から用語の捉え方を分析する。これらを通し、概念の属性と先行要因や帰結を明らかにし、概念の性質を明確にする。サンプリングした文献は、コーディングシートを作成し、主に概念を構成する特性である「属性」、その概念に先立って生じる「先行要因」、概念に後続して生じる「帰結」に関する記述を抽出した。さらに、レビューツールを用いて内容分析を行い、カテゴリー化した。

#### 2. データ収集方法

検索キーワードとして、「育児困難感」「母親」を用いて検索した。検索ツールは「医中誌Web Ver. 5」「CiNii」で、1983～2011年を調べ、重複する文献を処理した。42件の論文のうち入手可能であった21の文献(50.0%)を分析対象とした。

### III. 研究結果

#### 1. 属性

属性として、以下の2つのカテゴリーが抽出された(表1)。

【 】はカテゴリーであり、〔 〕は、カテゴリーの下位カテゴリーとなるサブカテゴリーである。

表1 育児困難感の概念の属性

カテゴリー	サブカテゴリー	内 容	著 者
母親自身のネガティブな感覚	自信のなさ	育児困難感とは、育児に対する自信がない状況	竹原他 (2009) <sup>7)</sup>
		育児への自信のなさ	小林 (2006) <sup>8)</sup>
		母親の育児に対する自信のなさ	細野他 (2005) <sup>9)</sup>
		「何となく自信がもてない」「うまく育てていない」「育児についていろいろ心配」といった	川井他 (1997) <sup>10)</sup>
		育児への自信のなさを中核としたものであり、うまく育てていない、あるいは育児への様々な心配と、受け身かつ自らの問題と捉える受動内罰的な心性をもつ	川井他 (1997) <sup>10)</sup>
		母親としての的確性に欠けるという認識	小林 (2006) <sup>8)</sup>
		子どものしつけや行動に関する悩みや困惑	小島 (2007) <sup>11)</sup>
		葛藤とともに、母親が育児や自分自身に自信がもてないこと	川上他 (2011) <sup>12)</sup>
	自責の念	母親の自己不信からくる不安感などの程度	細野他 (2005) <sup>9)</sup>
		もっと関わってあげたいのに十分に時間がとれず、申し訳なく感じる気持ちのひとつの因子	小島 (2007) <sup>11)</sup>
	自分との葛藤	母親自身の<思い通りに満たせない欲求>と育児の代わりがいない等の状況の中で<常にくすぶるイライラの火種>の間での《自分との葛藤》があった	川上他 (2011) <sup>11)</sup>
		子どもを自分の思い通りに《コントロールできない》葛藤がある	川上他 (2011) <sup>12)</sup>
	精神的負担	子どもとの関わりそのものに精神的な負担を感じる	川上他 (2011) <sup>12)</sup>
悲観的感	「行き詰まり感」「不全感」などの悲観的な困難感覚	浅野他 (1999) <sup>13)</sup>	
気遣い感	「特に理由はないが子どものことが気になる」「子どもと一緒にいないと落ち着かない」といった<気遣い感>	川井他 (1997) <sup>10)</sup>	
子どもへのネガティブなかかわり	八つ当たりストレス	育児困難感とは、子どもに対して穏やかに接することができない状況	竹原他 (2009) <sup>7)</sup>
		不安が外に向かって発散された状態の投射方(八つ当たり)ストレス	細野他 (2005) <sup>9)</sup>

【母親自身のネガティブな感覚】

母親自身のネガティブな感覚には、子どものしつけや行動に関する悩みや困惑<sup>11)</sup>にうまく対処できないことで、母親としての的確性に欠けるという認識<sup>8)</sup>に陥り、状況からの育児全般に対する〔自信のなさ〕が含まれていた。さらに、子どもに関わってあげたいのに十分な時間が確保できず、申し訳なく感じる母親の気持ち<sup>11)</sup>と表現される〔自責の念〕や自分の思い通りにコントロールできない子ども<sup>12)</sup>と母親自身の満たされない欲求との狭間による〔自分との葛藤〕をも含んでいた。これらの感覚は、やがて子どもとの関わりそのものを〔精神的負担〕として感じる<sup>12)</sup>ようになり、「行き詰まり感」「不全感」<sup>11)</sup>などの〔悲観的感〕へとつながっていた。一方で、子どものことが気になり、一緒にいないと落ち着かない<sup>10)</sup>といった〔気遣い感〕も含まれていた。

【子どもへのネガティブなかかわり】

子どもに対するネガティブなかかわりには、子どもに対して穏やかに接することができず<sup>7)</sup>、不安が外に向かって発散された状態<sup>27)</sup>である〔八つ当たりストレス〕がみられた。

2. 先行要因

先行要因としては、5つのカテゴリーが抽出された(表

2)。

【母親の要因】

母親の要因には、早産等の妊娠中の異常<sup>15)</sup>があったにもかかわらず、医療スタッフの妊娠期からの関わり不足が要因となり<sup>14)</sup>、出産後、母親自身の〔妊娠/分娩に関する否定的な感情〕が払拭されないことが含まれていた。そして、産後、育児に自信がもてないまま退院せざるを得ない<sup>19)</sup>状況から、授乳をはじめ様々な育児の仕方に疑問をもつことで<sup>14)</sup>、母親としての未熟さ<sup>20)</sup>を感じ、〔育児への自信のなさ〕が持続する状況が含まれていた。産後1ヶ月程は、子どもの泣きの理由や反応を試行錯誤しながら解釈する時期<sup>8)</sup>であり、〔母親役割獲得過程の途上〕である。しかし、現代の母親は、〔成育過程における子供との交流・世話経験の乏しさ〕<sup>15)</sup>世代であるため、〔現実との相違〕<sup>18)</sup>から〔子どもの反応の読み取り〕<sup>8), 14), 21)</sup>は容易ではない。これらの困難さは、〔児の欲求を満足させられない苛立ち〕<sup>14)</sup>となり、子どもと気持ちが通じ合っていない<sup>20)</sup>といった〔否定的な対児感情〕へと向かうことが含まれていた。さらに、これらの根底には母親の〔心身の状態〕、〔年齢〕、〔職業〕、等が関連していた。また、“心配性”、“内向的”、“感情的”等母親自身の〔性格〕は育児困難感に影響していた。

これらが要因となり、母親の〔不安・抑うつ傾向〕を増大させ、さらなる育児困難感を生みだす状況となることが含まれていた。

#### 【子どもの要因】

子どもの要因には、第一子であるがゆえの経験不足<sup>17), 20)</sup>と、第二子が生まれて子どもが複数になること<sup>15)</sup>やきょうだい間の年齢の差<sup>18)</sup>といった子どもの〔子どもの数〕が含まれていた。また、男児である<sup>11)</sup>という子どもの〔性別〕そのものが要因となり、標準体重に満たない<sup>26)</sup>、頸がすわる、寝返りができるなどの月齢に応じた子どもの〔発育・発達〕への不安も含まれていた。

さらに、子どもの気質<sup>20)</sup>や“ひっこみじあん”である等子どもの性格<sup>18)</sup>や、抱っこしていないと泣く等の一概には表現できない〔扱いにくさ〕が影響していた。

#### 【夫の要因】

夫の要因には、夫の〔育児協力〕<sup>11), 15), 24)</sup>は、単に育児や家事参加というよりも母親自身が夫と気持ちが通じ合っていると感じられる<sup>27)</sup>ような〔精神的サポート〕が重要となる。

#### 【育児支援】

育児困難感を軽減するためのサポート体制は、産後の〔在院日数の短縮化〕に伴い、育児に自信がないまま退

表2-1 育児困難感の先行因子(1)

カテゴリー	サブカテゴリー	内 容	著 者
母親の要因	妊娠/分娩体験に関する否定的な感情	豊かな出産体験をすることは、母親役割の受容について肯定的になるとともに、育児における不安や不適格感、攻撃衝動性が軽減・抑制される	竹原他(2009) <sup>7)</sup>
		双子を養育する育児困難感タイプの母親は、妊娠/分娩体験に関する否定的な感情が多くみられる	嶋松他(2004) <sup>14)</sup>
		妊娠中に起きやすいリスクについて知らされない	嶋松他(2004) <sup>14)</sup>
		母体搬送となつてことの重大さに気づかされる	嶋松他(2004) <sup>14)</sup>
		早産となつたこと	嶋松他(2004) <sup>14)</sup>
		医療スタッフの妊娠期からの関わり不足が要因となっている	嶋松他(2004) <sup>14)</sup>
		育児困難感がある母親には、妊娠中の異常があつたことが示された	山口他(2007) <sup>15)</sup>
	子どもの数(初産婦か経産婦か)	産後まもない初産婦にとって、未経験の育児は量的負荷、質的負荷の高い労働であり、ストレスとなる	相川他(2007) <sup>16)</sup>
		初めて子どもを育てる過程で経験不足からの<気遣い>が発生する	川井他(1997) <sup>10)</sup>
		第一子に対し、もっと関わってあげたいのに十分に時間がとれず、申し訳なく感じる気持ちが、育児困難感の因子として抽出された	小島(2007) <sup>11)</sup>
		育児を初めて体験する初産婦は育児困難感を抱きやすい	原田他(2009) <sup>17)</sup>
		第1子より第2子以降の方が育児困難感が高い	柘本他(1999) <sup>18)</sup>
	育児への自信のなさ	第2子となり子どもが複数になることが育児困難感を高める	山口他(2007) <sup>15)</sup>
		産後、育児に自信が持てないまま退院している	大塚他(2007) <sup>19)</sup>
		育児への自信のなさは育児困難感を高める	小林(2006) <sup>8)</sup>
		母親としての的確性に欠けると感じる母親は育児困難感が高い	小林(2006) <sup>8)</sup>
		育児困難感は、母親としての未熟感によって高まりやすい	茂本他(2010) <sup>20)</sup>
		母親の抱えている問題は、「授乳の難しさ」であつたが育児困難感の要因になっている	嶋松他(2004) <sup>14)</sup>
	子どもの反応の読み取り	自分の育児の仕方に疑問をもちながらの育児は、育児困難感につながる	嶋松他(2004) <sup>14)</sup>
		正常な発達過程の中で子ども本来の姿や反応の意味がわからないことが、育児困難感の要因となる	川上他(2011) <sup>12)</sup>
		母親の育児困難感には、子どもの反応をどう読み取るかにより変化する	小林(2006) <sup>8)</sup>
		抑うつな母親においても子どもの不安感情を読み取ることのできる母親は、育児困難感が軽減される	小原(2005) <sup>21)</sup>
		児の泣きに対する対処の難しさ	嶋松他(2004) <sup>14)</sup>
	成育過程における子どもとの交流・世話経験の乏しさ	子どもの欲求がよくわかると答えている母親は育児困難感が低い	柘本他(1999) <sup>18)</sup>
		育児演習で得た自信は、産褥1ヶ月後の育児困難感を低くする	相川他(2007) <sup>16)</sup>
		成育過程において幼い子供との交流や世話をした経験に乏しい母親達の母親役割獲得の困難さが窺える	原田他(2009) <sup>17)</sup>
産後、時間の経過に従い育児に慣れることで、育児困難感が低下していった		原田他(2009) <sup>17)</sup>	
育児経験の少ない母親ほど育児困難感が高い。子どもをもつ前に子どもと接したり関わることで、子どものプラスイメージが作られる		柘本他(1999) <sup>18)</sup>	
出産まで子どもと関わつたことのない母親は育児不安を増大させる	山口他(2007) <sup>15)</sup>		

院せざるを得ない<sup>19)</sup> ことが、育児支援の重要性と結びついている。母親は、〔サービスの種類〕として、電話相談<sup>19)</sup> や家庭訪問<sup>24)</sup> による相談の機会や、育児から解放される場としての託児<sup>19)</sup>、<sup>24)</sup> を望んでいた。また、自分の思いを表出したり、助けを求めたり、相談のできる社交の場<sup>18)</sup> や身近な専門職者であるかかりつけ小児科医<sup>18)</sup> の存在も重要である。これら多様な育児支援は育児困難感の強弱に影響していた。

### 【家庭の要因】

家庭の要因には、核家族<sup>15)</sup>、<sup>20)</sup> で母親が育児や家事の責任を一人で抱えやすいことや、逆に拡大家族で姑（義母）はじめ家族間での育児方針の違いがストレスになる<sup>12)</sup>、<sup>20)</sup> といった〔家族形態〕によるものが含まれていた。また、家庭が孤立<sup>15)</sup> し、育児や家事の責任を母親が抱え込んでしまう<sup>20)</sup> 等〔家庭機能の脆弱化〕が含まれていた。

表2-2 育児困難感の先行因子（2）

カテゴリー	サブカテゴリー	内 容	著 者
母親の要因	性格	“社会的”、“自分で決断する” 母親は育児困難感が低い	楢本他（1999） <sup>18)</sup>
		“心配性”、“感情的”、“内向的”、“緊張しやすい” “保守的” な母親は育児困難感が高い	楢本他（1999） <sup>18)</sup>
		子どもの成長・発達が“ゆっくり”と認識している母親は育児困難感が高い	楢本他（1999） <sup>18)</sup>
		他の子どもと比較する母親は育児困難感が高い	楢本他（1999） <sup>18)</sup>
	否定的な対児感情	子ども認知の歪みが育児困難感を生み出す可能性がある	川井他（1997） <sup>10)</sup>
		育児困難感、子どもと気持ちが通じ合っていないという母親に相関がみられた	茂本他（2010） <sup>20)</sup>
		単胎出生児と比べ、1歳、2歳の双生児の母親は児への否定的な感情を持っている者が多かった	西原他（2006） <sup>22)</sup>
		双生児の母親の育児不安は双生児が0歳の時点から高く、2歳時点ではさらに明確に高くなっていた	西原他（2006） <sup>22)</sup>
	不安・抑うつ傾向	母親の不安・抑うつ傾向がある	小林（2006） <sup>8)</sup>
		母親の抑うつは育児困難感を高める	小原（2005） <sup>21)</sup>
		母親の不安・抑うつ傾向があると育児困難感を上昇させる	茂本他（2010） <sup>20)</sup>
		育児上の不安や戸惑いがストレスとなり、育児困難感を抱きやすい	原田他（2009） <sup>17)</sup>
	日常管理能力	AD（アトピー性皮膚炎）児をもつ母親の育児困難感が疾患の重傷度、AD児の生活の困難度によって単純に決定されるのではなく、母親の日常管理能力によって左右される	浅野他（1999） <sup>23)</sup>
		一日の生活スケジュールを調整することの困難さが、育児困難感の因子となっていた	小島（2007） <sup>11)</sup>
		育児が母親の生活の中に埋め込まれており、家事その他を含め、限られた時間の中で、多重に押し寄せるさまざまなことをいかにこなすか、いわば待ったなしの状況への戸惑いが、育児困難感の因子となっていた	小島（2007） <sup>11)</sup>
	現実との相違	日々、育児に追われ、余裕がないには、育児情報や育児支援制度を把握すること自体が難しい	川上他（2011） <sup>12)</sup>
		育児困難感、日常生活に対する期待との相違とに相関がみられた	茂本他（2010） <sup>20)</sup>
	児の欲求を満足させられない苛立ち（双胎）	双子が同時に泣いたときの対処に困難を感じる	嶋松他（2004） <sup>14)</sup>
		双子であり、同時に要求を満足させてあげられない苛立ちとなる	嶋松他（2004） <sup>14)</sup>
	職業	有職者であり、仕事と家事育児の両立に困難感をもっている	大塚他（2007） <sup>19)</sup>
		仕事を持っている母親の方が育児困難感が低い。つまり、専業主婦の方が高い。母親の職場でのコミュニケーションや保育所での関わりが育児の孤立化を少なくしている	楢本他（1999） <sup>17)</sup>
	心身の状態	母親の心の不健康感が基本的な要因である	川井他（1997） <sup>10)</sup>
		睡眠不足が疲労に繋がり育児困難感の要因となる	嶋松他（2004） <sup>14)</sup>
年齢	育児困難が強い母親は高齢である	大塚他（2007） <sup>19)</sup>	
	双生児は単胎出生児と比較すると、双生児の母親は児の年齢が高くなるにつれて子育てに困難を感じている者が多かった	西原他（2006） <sup>22)</sup>	
母親役割獲得過程の途上（産後1ヶ月）	産後1ヶ月では母親役割獲得過程の途上にあることから育児困難が増大する可能性がある	原田他（2009） <sup>17)</sup>	



表2-3 育児困難感の先行因子(3)

カテゴリー	サブカテゴリー	内 容	著 者	
育児支援	具体的サービス	育児相談(電話)を知らない	大塚他(2007) <sup>19)</sup>	
		育児困難感の強い群の母親は、【家事ヘルパー】、【産後ケアセンター】、【定時以外の保育(延長保育など)】、【土日の予防接種】の全ての項目を望んでいる	大塚他(2007) <sup>19)</sup>	
		育児から解放される時間の確保によりストレスの軽減を図られる	大塚他(2007) <sup>19)</sup>	
		自分の思いを表出したり、助けを求めたり、相談することができるような社交の場の提供も必要である	楢本他(1999) <sup>18)</sup>	
		遊び場が近くにあり、外遊びの頻度が多く、遊び仲間に入れる母親は育児困難感が低い	楢本他(1999) <sup>18)</sup>	
		相談者のいない母親は育児困難感が高い	楢本他(1999) <sup>18)</sup>	
		育児協力者のいない母親は育児困難感が高い	楢本他(1999) <sup>18)</sup>	
		かかりつけの小児科医のいない母親は育児困難感が高い	楢本他(1999) <sup>18)</sup>	
		育児困難感の強い母親は、「託児」や「家庭訪問」を利用したい	和田他(2007) <sup>24)</sup>	
		「家庭訪問」で母親は困難感について相談したい	和田他(2007) <sup>24)</sup>	
在院日数の短縮化		産後の在院日数が短く、育児に自信がないまま退院している	大塚他(2007) <sup>19)</sup>	
		退院後の協力日数が少ない	大塚他(2007) <sup>19)</sup>	
家庭の要因	家族形態	「夫の両親と同居中であるがあまり協力してくれない。育児の面でいざこざがおこることもしばしばある」	川井他(2000) <sup>23)</sup>	
		姑(義母)との育児に関する意見のくい違いから言いたいことが言えずストレスとなっている	川上他(2011) <sup>12)</sup>	
		核家族の母親は、育児や家事の責任を1人で抱えやすい状況により、育児困難感を抱く	茂本他(2010) <sup>20)</sup>	
		拡大家族の母親は、家族間の育児方針の違いにより、育児困難感を抱く	茂本他(2010) <sup>20)</sup>	
		核家族化	山口他(2007) <sup>15)</sup>	
	家庭機能の脆弱化		「…。体力的にきついが普段は手伝ってくれる人がいない」	川井他(2000) <sup>23)</sup>
			家庭全体にリスク、家庭内がハイリスクで閉塞状態	川井他(2000) <sup>23)</sup>
			人を頼れず、相談もできず、育児を一人で頑張っているのに上手くいかない状況がみられ、一方で、他人の評価は気になり、プレッシャーを感じやすい状況にある	川上他(2011) <sup>12)</sup>
			家庭の孤立化	山口他(2007) <sup>15)</sup>
			常時育児の協力者がいないことが、育児困難感を強くしている	和田他(2007) <sup>24)</sup>
子どもの要因	子どもの扱いにくさ(Difficult Baby)	「夜寝る時間が遅い、飲んだ後、かならず吐く、寝返りをしない」といった子どもの扱いにくさ	川井他(2000) <sup>23)</sup>	
		「離乳食を食べる時落ち着いて座って食べてくれない…どこまで許してどこからしつけてあげればいいのかわかりません」	川井他(2000) <sup>23)</sup>	
		「抱っこしていないと泣く。眠ったと思ってベッド等に寝かせると15分も眠らずに泣く。…」	川井他(2000) <sup>23)</sup>	
		育児困難感、子どもの気質と関連がある	茂本他(2010) <sup>20)</sup>	
		性格が“ひっこみじあん”な子どもの母親は育児困難感が高い	楢本他(1999) <sup>18)</sup>	
		子どもの性格が“活発”、“要求がはっきりしている”、“ほがらか”な子どもの母親は育児困難感が低い	楢本他(1999) <sup>18)</sup>	
	発育・発達		生後6カ月頃からの子どもの発達の特徴は、母親の育児困難感を高める要因となる	高橋(2007) <sup>25)</sup>
			児の発達の遅れ(標準体重に満たない)が、母親の育児困難感にも影響を及ぼしている	廣瀬他(2007) <sup>26)</sup>
	子どもの性別		第二子が男児である場合の方が、育児困難感は低い	小島(2007) <sup>11)</sup>
	きょうだい間の年齢差		きょうだいの年齢差が大きいほど、育児困難感は低い	小島(2007) <sup>11)</sup>

3. 帰結

帰結としては、4つのカテゴリーが抽出された(表3)。育児困難感、母親の「抑うつ感情の高まり」に関連<sup>17)</sup>をきたす。そして、子どもへの影響として「子ど

もとの関わりの質の低下<sup>22)</sup>が著明となり、母親の「愛着形成の阻害<sup>17)</sup>」をも招く。ひいては「虐待へのリスク」<sup>23)</sup>を高めることが示唆されていた。

表2-4 育児困難感の先行因子（4）

カテゴリー	サブカテゴリー	内 容	著 者
夫の要因	精神的サポート	夫が育児に協力し、夫の協力度に満足し、夫婦でよく話し合う母親は育児困難感が低い	榎本他（1999） <sup>18)</sup>
		夫の育児への協力度が低い母親より、夫の協力への妻の満足度の低い母親は育児困難感が高い	榎本他（1999） <sup>18)</sup>
		夫婦の話し合いの頻度にも影響がみられ、生活の種々の事がらについて日常的に話し合い、支え合う夫婦関係を確立することが、母親の育児不安を軽減するうえで重要になる	榎本他（1999） <sup>18)</sup>
		配偶者との気持ちが通じ合っていると認めない母親は、育児困難感が高かった	増野他（2004） <sup>27)</sup>
	育児協力	夫と子どものことを話し合う機会があまりない母親では育児困難感が高かった	増野他（2004） <sup>27)</sup>
		夫が、第二子によく関わっているほど、育児困難が低い	小島（2007） <sup>11)</sup>
		父親不在の状況は育児困難感を増大させる	山口他（2007） <sup>15)</sup>
		夫からの育児協力は母親の育児困難感を減少させる	和田他（2007） <sup>24)</sup>

表3 育児困難感の概念の帰結

カテゴリー	内 容	著 者
虐待へのリスク	虐待へのハイリスク	川井他（1997） <sup>10)</sup>
	ネガティブ感情のひとつイライラ感は児童虐待と深く関係する	川上他（2011） <sup>12)</sup>
抑うつ感情の高まり	育児困難をより強く感じる母親ほど抑うつ感情が高まる	原田他（2009） <sup>17)</sup>
愛着形式の阻害	ストレスフルな育児体験の中では児への愛着形成は阻害される傾向にある	原田他（2009） <sup>17)</sup>
子どもとの関わりの質の低下	子どもに八つ当たりしてしまうなどの母親の精神的に追い詰められている状態が子どもとの関わりの質に影響する	西原他（2006） <sup>22)</sup>

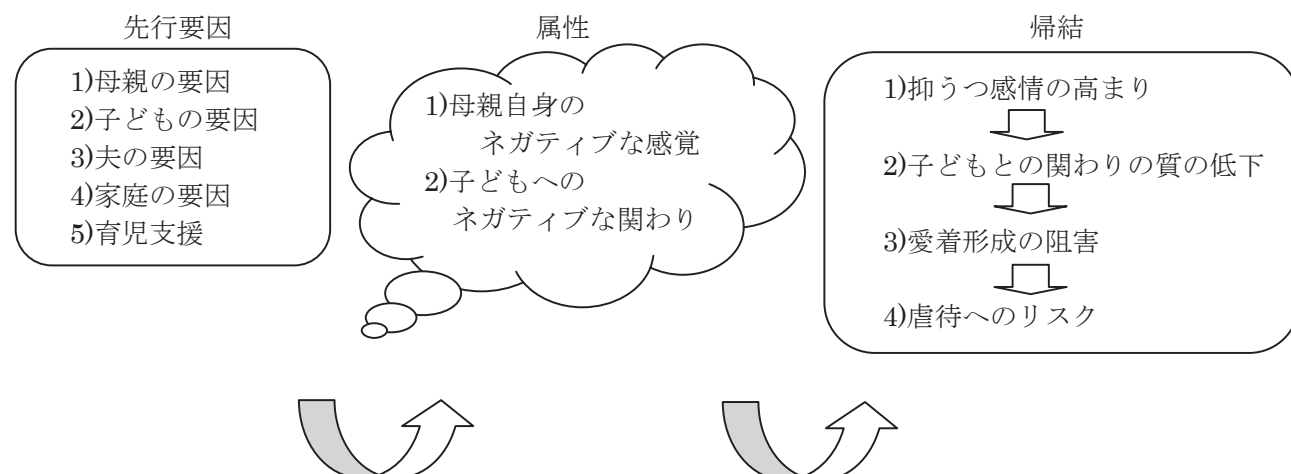


図1 母親の育児困難感の概念モデル

#### IV. 考察

##### 1. 「母親の育児困難感」の概念モデル

「母親の育児困難感」は、図に示すような概念モデルで構築された（図1）。

「母親の育児困難感」は、母親の要因を基盤に取り巻く人的環境としての子ども、夫、その他の家族が関連要因として含まれる。母親の要因は、人格形成の基盤となる性格に、成育過程での子どもとの交流経験の有無や自分の経験した妊娠、分娩の捉え方が影響する。さらに、新たに家族として加わった子どもの存在により、日常生活の変更が余儀なくされ、現実との相違から、育児への

自信のなさが助長される。結果、不安・抑うつ傾向となり、育児困難感が高まる。

牧野が、育児不安を「育児行為のなかで一時的あるいは瞬間的に生ずる疑問や心配ではなく、持続し蓄積された不安」<sup>28)</sup>と定義して以来、育児ストレス、育児ノイローゼなど曖昧なものが同義語として使われてきた。本研究において構築した「母親の育児困難感」では、その特性として、あくまでも母親自身が自覚しているネガティブかつ感覚的なものを重要視する必要性が示唆された。

一方で、先行要因にある育児支援が適切なかたちで行われれば、育児困難感は軽減することができることもわ

かった。産褥期の母親に対して話を傾聴し、行っている育児に対し、受け止め、認めるケアが必須である。母親自身が選択した育児技術や育児方法を認めることは、これで大丈夫という感覚を生み出し、育児への自信となる。さらに、母親を孤立させないためのネットワーク作りが重要であると考えられる。

## 2. 育児支援構築に向けての「母親の育児困難感」の概念の有用性

「母親の育児困難感」の帰結として、母親の抑うつ感情がさらに高まると、子どもとの関わりの質は低下することが示唆された。さらに、健全な母子の愛着形成は阻害され、ひいては虐待へのリスクが高まる。したがって、育児支援に関わる専門職者として、「母親の育児困難感」の概念である母親自身の母親としての的確性に欠けるという認識や育児全般に対する自信のもてないネガティブな感覚を察知することが必要であると考えられる。そして、母親である自分を認め、自身の行う育児全般への自信を向上させるための具体的な介入方法の検討が急務である。

## 3. 今後の課題

先行要因として示されたものは、時代の変遷とともに様相を変えていくもの<sup>29)</sup>であるため、「母親の育児困難感」も変化していくと考えられる。そのため、今後、さらに現代の母親の状況に合致した概念であるかの詳細な検討が必要である。

## V. 結語

「母親の育児困難感」の定義を、『母親としての的確性に欠けるという認識に陥り、育児全般に対して自信のもてない母親自身のネガティブな感覚である。』とした。

この定義より、育児支援に関わる専門職者は母親自身の感覚に寄り添い、子育てにおいて経験する現象をポジティブな感覚として捉えられるような実践介入の構築が課題となった。

## 文献

- 1) 『健やか親子21』公式ホームページ (2012), 2012年3月5日, <http://rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/>
- 2) 牧野カツコ: 育児における<不安>について, 家庭教育研究所紀要, 2, 41-51, 1981.
- 3) 川井尚, 庄司順一, 千賀悠子, 他: 育児不安に関する基礎的検討, 日本総合愛育研究所紀要, 30, 27-39, 1994.
- 4) 川井尚, 庄司順一, 千賀悠子, 他: 子ども総研式・育児支援質問紙(ミレニアム版)手引の作成, 日本子ども家

庭総合研究所紀要, 37, 160-180, 2001.

- 5) Rodgers, B. L. & Knafl, K. A.: Concept Development in Nursing: Foundations, Techniques, and Applications (2nd ed), 77-102, W.B.Saunders Company, Philadelphia, 2000.
- 6) 上村朋子, 本田多美枝: 概念分析の手法についての検討 - 概念分析の主な手法とその背景 -, 日本赤十字看護学会誌, 6 (1), 94-102, 2006.
- 7) 竹原健二, 野口真貴子, 嶋根卓也, 他: 豊かな出産体験がその後の女性の育児に及ぼす心理的な影響, 日本公衆衛生雑誌, 56(5), 312-321, 2009.
- 8) 小林康江, 遠藤俊子, 比江島欣慎, 他: 1ヶ月の子どもを育てる母親の育児困難感, 山梨大学看護学会誌, (5) 1, 9-16, 2006.
- 9) 細野恵子, 松本舞子, 岩本純: 育児ストレスと母親の体温調節 - 鼓膜温と前額温からみたストレス調査 -, 臨床体温, 23(1), 39-43, 2005.
- 10) 川井尚, 庄司順一, 千賀悠子, 他: 育児不安に関する臨床的研究Ⅲ - 育児困難感のアセスメント作成の試み -, 日本総合愛育研究所紀要, 33, 35-56, 1997.
- 11) 小島康夫: 二人の子どもがいる母親に特有の育児困難感とその背景要因 - 4か月齢の第二子を持つ母親と19か月齢の第二子を持つ母親の比較を通して, 小児保健研究, 66(6), 821-831, 2007.
- 12) 川上智美, 澤村くるみ, 松本美弥, 他: 乳幼児をもつ母親の育児に対するネガティブ感情の構造に関する一考察 - 母親へのフォーカス・グループ・インタビューから -, 四国公衆衛生学会誌, 56(1), 139-145, 2011.
- 13) 浅野みどり, 石黒彩子, 兼松百合子: アトピー性皮膚炎の乳幼児をもつ母親の育児困難感に関する研究, 日本看護医療学会誌, 1(1), 9-18, 1999.
- 14) 嶋松陽子, 高山知美: 双子を養育する母親の育児困難感とその要因, 保健科学研究誌, 1, 35-42, 2004.
- 15) 山口忍, 丸井英二, 齊藤進, 他: 1歳児をもつ母親の育児困難感, 順天堂医学, 53, 468-476, 2007.
- 16) 相川祐里, 吉田敬子: 育児困難感から子どもへの虐待が危惧される出産後の母親に対するグループワークの試み - 「Attachment Style Interview」を応用して -, 子どもの虐待とネグレクト, 9(2), 202-212, 2007.
- 17) 原田なをみ, 片平起句, 森田ひろみ, 他: 産後の抑うつ感情の変化と愛着形成・被養育体験との関連 - 産褥早期から産後3~4ヶ月までの縦断的調査より -, 日本看護学会論文集: 母性看護, 40, 114-116, 2009.
- 18) 栞本妙子, 福本恵, 堀井節子, 他: 育児不安の実態と関

- 連要因の検討(第2報)～育児不安測定項目の因子分析, 京都府立大学医療技術短期大学部紀要, 8(2), 193-172, 1999.
- 19) 大塚みゆき, 高野政子, 山下早苗, 他: 4ヶ月児を持つ母親の母子保健サービスの利用実態とサービスに対するニーズ, 日本看護学会論文集: 小児看護, 37, 119-121, 2007.
- 20) 茂生咲子, 奈良間美保, 浅野みどり: 母親が認識する乳児の状態と育児困難感の特徴とその関連, 小児保健, 69(6), 781-789, 2010.
- 20) 小原倫子: 母親の抑うつおよび情緒応答性と育児困難感との関連, 小児保健研究, 64(4), 570-576, 2005.
- 22) 西原玲子, 服部律子, 小林葉子, 他: 母親の育児不安と双生児の精神運動発達との関連性の検討-双生児と単胎出生児の比較から-, 日本公衆衛生雑誌, 53(11), 831-841, 2006.
- 23) 川井尚, 庄司順一, 千賀悠子, 他: 育児不安に関する臨床的研究Ⅳ-子ども総研式・育児支援質問紙(試案)の臨床的有用性に関する研究, 日本子ども総合研究所紀要, 36, 117-138, 2000.
- 24) 和田宜子, 高野政子, 山下早苗, 他: 1歳6ヶ月児を持つ母親の育児支援サービスの利用実態とニーズ, 日本看護学会論文集: 小児看護, 37, 116-118, 2007.
- 25) 高橋有里: 乳児の母親の育児ストレス状況とその関連要因, 岩手県立大学看護学部紀要, 9, 31-41, 2007.
- 26) 廣瀬幸美, 宮本千史, 市田路子, 他: 乳児期に心臓手術を要する児の発達に関する研究-1歳半における発達とその関連要因-, 小児保健, 66(1), 75-82, 2007.
- 27) 増野恵, 石原理津子, 北川かほる: 幼児をもつ母親の育児不安について-母親と父親を対象とした調査より-, 日本看護福祉学会誌, 10(1), 92-93, 2004.
- 28) 牧野カツコ: 乳幼児をもつ母親の生活と<育児不安>, 家庭教育研究所紀要, 3, 34-56, 1982.
- 29) 渡邊茉奈美: 「育児不安」の再検討-子ども虐待予防への示唆-, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 51, 191-202, 2011.